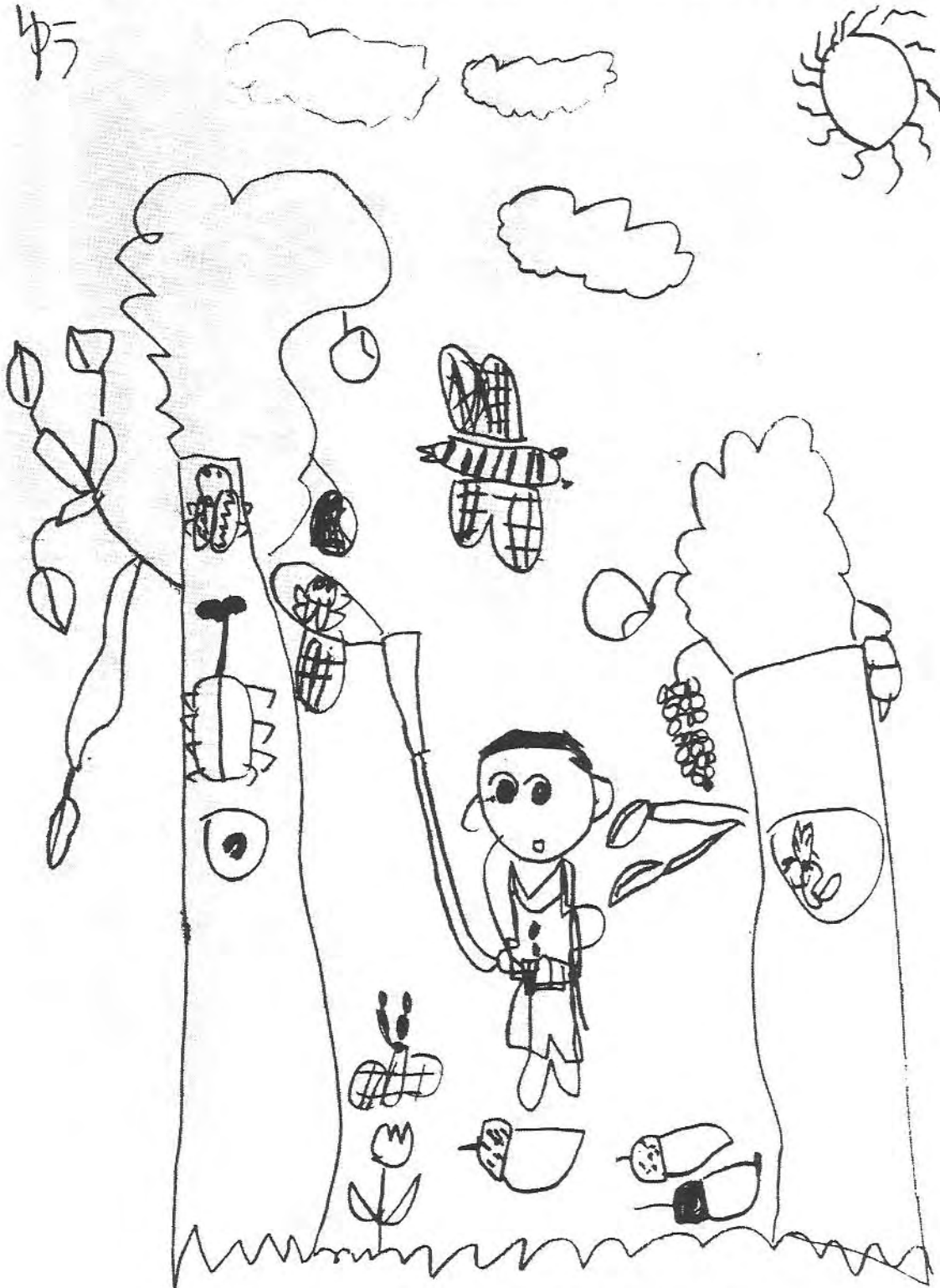


Multilette

Fédération Internationale des Mouvements de l'Ecole Moderne



< RIDEF '98 日本特集号 >

MULTILETTE
RIDEF'98 JAPAN 特集号
RIDEF'98 JAPAN Special Issue

目次
CONTENTS

| | | |
|-----|---|-----|
| 1. | RIDEF'98 JAPAN 開催要項 | 5 |
| | RIDEF '98 JAPAN General Information | 6 |
| 2. | 日程表 / Schedule | 8 |
| 3. | アトリエ紹介 | 9 |
| | Introduction of Atelier | 12 |
| 4. | 開催場所：自由の森学園紹介 | 16 |
| | Introduaction of the place for RIDEF98: | 17 |
| | Jiyu no Mori Gakuen Junior and Senior High School | |
| 5. | 開催場所地図 / Map | 19 |
| 6. | RIDEF'98 JAPAN のために (里見 実) | 21 |
| | FOR RIDEF '98 IN JAPAN by Minoru Satomi (Japan) | 23 |
| 7. | 国際集会におけるフレネ教育 (イタリア / マルタ・フォンターナ) | 25 |
| | Aspetti della pedagogia Freinet nel contesto degli incontri internazionali by Marta Fontana (Italia) | 28 |
| 8. | 世界のフレネ教育運動 | |
| | Freinet Educational Movement in the world | |
| | ・ スイス (シルヴィア・ヘルゾグ) | 33 |
| | Switzerland by Silvia Herzog | 35 |
| | ・ スペイン (テレザ・フローレス・マルティネス) | 37 |
| | Spain by Teresa Florez Martinez | 40 |
| | ・ ポーランド (ゾフィア・ナプルコフスカ) | 44 |
| | Poland by Zofia Napiórkowska | 45 |
| | ・ ブラジル (レイナルド・マティアス・フレウリ) | 47 |
| | Brazil by Reinaldo Matias Fleuri | 56 |
| 9. | DEAR CÉLESTIN (スウェーデン / A・ルッツ・クレマー) | 65 |
| | Dear Célestin by Amitiés Lutz Kremer (Sweden) | 67 |
| 10. | 日本にフレネ教師は何人いるか (村田栄一) | 69 |
| | Combien d'enseignants Freinet y-a-il au Japon? by Eiichi Murata | 73 |
| 11. | 学校は脱皮できるか (村田栄一) | 77 |
| | L'ecole est-elle capable de se renouveler? by Eiichi Murata | 91 |
| 12. | 日本の生活綴方運動 (里見実・船橋一男・浅井幸子) | 109 |
| | "L'histoire du séikatsu-texte au Japon" by Satomi, Funabashi, Asai | 133 |

| | | |
|-----|---|-----|
| 13. | しいたけづくり (河合 達) | 163 |
| | Equipo de cultivo de shiitakes by Toru Kawai (Japan) | 164 |
| 14. | ぼくらは虹を見た (荻原俊一) | 219 |
| | Nous avons vu un arc-en-ciel by Shunnichi Ogihara (Japan) | 224 |
| 15. | FIMEM 組織一覧 | 231 |
| | La Federation International Des Mouvements Ecole Moderne | 231 |
| 16. | FIMEM 執行委員会 / B.D. of FIMEM | 234 |
| 17. | 翻訳協力者 / Collaborators for the translation | 235 |



世界のフレネ教育運動

ブラジル

レイナルド・マティアス・フレウリ

今日ブラジルはヨーロッパでは、一般的に次のようなもので知られています。サッカーに代表されるスポーツ界での活躍（ワールドカップで4回優勝、フォーミュラ1（アイルトン・セナやエマーソン・フィッティパルディを思い出して下さい）アマゾンの荘厳な大秘境、ドラマチックとも言える政治情勢（24年間の軍事独裁の後、新民主憲法が公布され、1988年にやっと民主主義体制が再建されました）、深刻な社会問題（『ストリートチルドレン』や土地を持たない農民を思い描いて下さい）。

大陸国ブラジルは、南アメリカの8,511,965km²を占めており、人口は約1億5千万を数えます。

その領土は肥沃な土地と豊かな鉱物資源と生態系に恵まれた大西洋沿岸から広大なアマゾンの森林の間に広がっています。

まさにブラジルはこの魅力溢れる土地ゆえに、この5世紀の間、一獲千金を狙う征服者や探検家を惹き付けてきました。まず、ポルトガル人が1822年まで、植民地としてブラジルを統治しました。採れる限りの金や貴石を採掘したり、ヨーロッパ市場に供給するためのサトウキビやコーヒーの集約農業を始めました。この生産は、3世紀の間、大土地所有と奴隷労働力に基づいて行われました。まず初めに、インディオを奴隷として使うことが試みられました。ブラジル植民地の拡大は、とりわけ貴石を追い求め、またインディオを襲撃して森林の奥へと入り込んで行ったバンデイランテス（BANDEIRANTES）のおかげによるものでした。しかし、インディオ達は服従させられるがままにはならず、徐々に減びていきました。（1500年には5百万人いたのが、今日では909,705km²の広がる領土の中に、577の保護区があり、そこに10の部族、全部合わせて26万人しか住んでいません。）

減びていったインディオの代わりに導入されたのが、アフリカ人です。（1888年に奴隷制度が廃止された時、3百万人の人口のうち、約120万人がアフリカ人でした。現在でも、ブラジルの人口の約半分がアフリカ系です。）

19世紀の半ばになると、奴隷労働力に代わって、ヨーロッパ、アラブ、日本、中国からの移民が奨励されました。この移民たちは、とりわけ南部へと行き、工業化と農業開発を促進し、サン・パウロ、リオ・デ・ジャネイロ、南リオ・グランデをブラジルの中でも最も豊かな都市へと発展させていきました。

今日、ブラジルは世界でG7の次に経済力があるといわれています。しかし、その富は道理に反して、不平等に分けられています。

その貧富の差（国連の調べによる、読み書きができる、できない、就学の割合、生活の予測が立つか立たないか、国内総生産及び一人あたりの所得の差など）はより具体的なパーセンテージから理解することができます。

例えばそれは、全体の20%を占める最も裕福な人たちは、最も貧しい20%の人たちの32

倍の物を手に入れられるということから表されます。(日本では、その差はたった5倍だけです。) ブラジルの人口の80%以上は、120ドル以下の所得で生きていかなければならず、さらにその約30%の人たちは、慢性的な極限の貧困状態で生きています。

農地の分配はさらに不平等な状況です。1000ヘクタール(1千万平米)以上に及ぶ大規模所有地が肥沃な土地の44%を占めています。これは、ブラジルの農地の1%にしか相当しません。一方、10ヘクタール(10万平米)以下の小規模所有地は概して最も生産性の高い土地で、農地の53%に相当しながら、国土の2.5%にしかありません。

社会運動の力

これまでのわずかな紹介からも広範囲にわたる根深い社会問題や矛盾が生まれるべくして生まれる経済的・政治的システムであることがわかります。(大規模な多国籍企業が資本蓄積の利益を得るのに都合のいいように、60年代から軍事政権の力を借りて発展を押し進めてきたことによる) この社会矛盾のため、ブラジル人は生命をかけて多くの社会運動をおこしました。

1978年にS・ベルナルド・ド・カンボ(その街は、大都市サン・パオロに隣接している小さな工業の街です。労働者はヨーロッパからの移民、とりわけイタリアからの移民です)で始まった新しい組合運動は、最近のブラジルの政治の民主主義的解放に大きな影響を与えました。この新しい労働組合主義の動きは、より民主主義的な労働者組織をつくり、中央組合本部の結成を促しました。

この中央組合本部は(独裁時代、進歩派協会の支援の下存続に耐えてきた)他の集団と共に社会運動を始め、1979年の政治的な理由での亡命者に対する恩赦の許可を得、政党改革、1988年の憲法改正を実現し、1989年からは共和国大統領直接選挙を実現させるに至りました。



ミコウ

た。

最初の年の選挙では、社会運動に基盤を置き、全国から広く指示を受けた労働党のリーダーで、自らも労働者である Lula が候補に挙がり、かなりいい線までいき、もう少しのところで破れました。

ブラジルは民主運動が非常に多い国の一つで、その種類を挙げてみると、国中に、土地・住居のための闘争運動、黒人運動、女性地位向上運動、エコロジー運動、協同組合運動、ストリートチルドレン、医療施設に関する運動、障害者運動、地域社会運動、生産者、消費者のための運動など様々です。

1993年の10月に「中央市民運動本部」が設立されました。この「中央市民運動本部」は他の市民協会と共同で、とりわけ CUT（労働統一中央本部）、DIEESE（統計研究職労働組合部）、OAB（ブラジル法律家団体）、CNBB（ブラジル全国司教協議会）、ABI（ブラジル出版協会）、政治家養成学校や研修機関、民間、社会運動を支援する非政府組織と協力して活動します。「中央市民運動本部」は、情報を提供し、人々を動かし、声明を出し、そして虐げられた社会階層の共通の利益のための多種多様な闘争運動や告訴運動を起こすよう努めています。

この運動のなかでは MST の農民運動が最も典型的です。

この各種運動の中で、「土地のなき者の運動（MST）」は農民闘争の最も代表的なものです。この「土地なき者の運動」は全国レベルで組織され、農地改革に対する農民の闘いの表われで、大土地所有者や大土地所有者を優遇する経済や土地所有政策によって農地から追われた、何百万という農民の土地や労働と生産条件を守るための闘いです。激しく、血生臭さい闘争です。

都市部で起こる闘争もとても深刻です。特にファヴェーラスと呼ばれるバラック住まいやストリートチルドレンでわかるような悲惨な社会疎外を被り、失業、文盲、売春や犯罪という状況を背負った農地から追い出された人達や職を失った人達が都市へと流れ込み、都市は巨大化していきました。先に触れた都市における多種多様な多くの民衆運動は、この農村部からの爆発で始まったのです。

民衆教育の様々な局面

ブラジルで民衆教育が様々な矛盾した形で発展したのは、大きな経済格差や政情の緊迫があり、民衆運動が起こる環境が存在していたからです。

19世紀の終わりから20世紀の初めにかけて、ラテンアメリカのインテリ層や教育者から公立学校創設闘争が開始されました。その闘争の中で、組織的方法として活動家の間では「民衆教育」という表現が初めて使われました。政府や民間の組織を巻き込んだこの運動が提唱したことは、学校への入学在学環境の平等、自由、多元論、無償教育、公私の学校施設の共存、民主的運営、教育の専門家たちの有効活用、学校外活動、質の保証、仕事や社会への適応に結びつく教育などを規定する新しい国家教育の基本方針法の中の表現に見い出せます。

しかし、組織や教育方法論の不備が拡大するにつれて公立学校の構造的不安定が増し、私立学校ばかりにエリートが集まりすぎ、ブラジルの大部分の人が服従や社会的疎外を強いられ、そして、全ての市民に批判的教育を保証するために闘っている社会運動の道は決して楽ではありません。

そして教育方法がまだ確立されていないために、ブラジル人の大部分は、服従や社会的疎

外を強いられています。全市民の教育を保証するための闘争である社会運動の道は決して楽ではありません。

民間層に向けられた教育の、もう一つの意義深い点は、これが「大人の教育」でもあったことです。南アメリカ大陸の植民地時代に既に、「貧しい人々、インディオ、黒人」へのキリスト教の布教活動が行われ、ブラジル帝国が終わったとき（1889年）には、大人のための夜学が創られました。しかし大人の教育は30年代のはじめに強く要求され、特に Getulio Vargas の独裁政治の時（1945年）に提案されました。

産業化、都市化が進み国家人民主義的な政府が成長した結果、大衆に読み書きができるようにする課題は、大人の教育をということで、政府の大々的なキャンペーンで運動が開始され、最優先されました。

大人の教育のためのキャンペーンは、最初は UNESCO が、60年代には USAID が支援し、支配者層の政治戦略の一環として、大人の読み書きを可能にすることで地域社会の発展を促進しようというものでした。

国家機関から始まった大人の教育のための活動は、民間組織と民衆運動から展開された教育実践全体と矛盾を示しながらも結びついていきます。この最近の民衆教育の傾向は、一貫して下層階級のためを考えたものでした。例として、1920年に労働者による社会主義的、無政府主義的な組織が創り、運営していた学校が挙げられます。

また、60年代の初め、社会運動の下で現われた様々な教育活動もまた、この傾向の一貫として考えられます。

70年代後半には民間運動に助言する無数のグループの支援のおかげで力強くなり、80年代の終わりにはブラジル国家が民主化される際、さまざまな制度化がなされました。

今日一般的に、『民衆教育』と言えば、全市民に基本的な教育を保証しようというこれらの過程を指すことができます。しかし、もっと厳密な政治的な意味において、2つの流れに分けられます。

1つは、支配と酷使の一連の状況下に適応するように人々の孤立化と服従を強める、支配階層によって押し進められた教育活動です。もう1つは一般的に民衆運動と共同で出された提案で、自立、政府活動への参加、積極的な市民権の行使を推進するものです。

後者の中で重要なのは、批判的な反響や共同活動を通して、人々が生きている現実の諸問題を理解して立ち向かおうとするその主体の相互関係を保証することです。そうすれば、民衆教育は『単に大衆のためだけでなく、大衆とともに』つくる質的により確固たる政治的意義を獲得するのです。

フレネ教育学の貢献

フレネ教育学は、ブラジルの教育者達がフランスの現代学校の活動に従事する教育者達と接触をとり始めた1970年以降にブラジルに導入されました。

フレネ教育学は大学で大いに研究され、学生達に小学校や高等学校のクラスでフレネ・テクニクの体験を導入したいという意欲を駆り立てました。様々な学士論文が念入りに書かれました。教師養成や、他国（特にフランス）の現代学校運動との交流活動のおかげで、フレネ教育学は、少しずつブラジルで知られるようになりました。

1970年代までに、フレネ教育学に基づいて組織された児童教育の様々な学校が創られました。それは、教育者と生徒の新しい関係を試みる『もう一つの』教育体験を実現したいと願う教育者と両親とのグループによって創られた学校でした。そこには、様々な民衆教育に

着想を得た、ブラジルのもう一つの学校の姿があり、沢山の多種多様な実験がありました。意義深く、葛藤もあれば、可能性に溢れた実験です。教育提案がより自主的な形で、公立や私立学校に根づくのに適した土壌に巡り会えるよう、何度も試みがなされています。

一般に経済的なゆとりのある私立の学校では、特に階層化した教育や管理構造が原因で、困難が生じます。この構造では、家庭や社会環境の圧迫や宗教的圧力、さらに保守派や有産者の利益に結びついた中央管理のやり方から離れるという冒険を犯す進取の精神が限定されてしまいます。

公立学校では既に、次々に変化する政治方針や、教育と機能の関係の官僚主義的空白により悪化をたどる労働条件の不安定と不確実のために、新たな教育学的実験が継続され根づくことが阻まれています。

この新たな実験を行うためには長い成熟期間を要し、教育者グループの養成と強化に依存します。こうした背景の中でフレネ教育は、公立学校で地味な活動が行われているのと、独立した、あるいは大学の大きな支援を得て民間組織と協力して行われてきたという実績がありますが、オールタナティブな私立学校でより広まっていることが実証されています。

ブラジルのフレネ教育者たちの活動は、今日主に、北ノ北東、南東、南の3つの地域に分かれて組織されています。

統合的なものではなく、特に距離の隔たりがあり、かつ交通と伝達に経費がかかるのが原因で、地域間のコミュニケーションには困難な点が多くあります。にもかかわらず運動グループ間のコミュニケーションを促進するために多くの企画が出され、国家、地域レベルで実現されました。例として、全国で出版された(1978—80年) "Bollettini Informativi" (情報紙) や地域誌(中でも“サンタカテリーナのフレネ地域運動”は1996年までに6冊を刊行)の出版が挙げられ、最近では1996年にサンパウロでフレネ教育学のフォーラムが創設され、インターネットの使用などもあります。

1988年、ブラジルの南、フロリアノポリスで第17回RIDEFが実現し、それは、全国的に運動を結びつける意義深いものでした。その後も特に全国集会を通してさらに結びつきが強くなりました。

また、この1988年のRIDEFは、他国の運動とブラジルのグループとの実り多い出会いと交流の機会でもあり、そして様々な協同プロジェクトが生まれるきっかけにもなりました。

フレネ教育学のブラジルの民衆教育への貢献はまだ始まったばかりで、生徒たちの持つ文化を尊重し、評価しようとする多忙な教師たちからはむしろかけ離れた作業の成果と言えます。

しかし、読み書きの教育、教師の育成、学校の再編成、市民権が行使できる条件を整えることなどの分野においては、意義深い貢献があったことが確認できます。

そして実践面にせよ理論面にせよフレネ教育学がもたらす豊かさは、他の民衆教育学との融合を見れば明らかです。

パウロ・フレイレとフレネ

民間教育の分野で実現したこうした企画事業の質が高かったということは、例えば、セレスタン・フレネとパウロ・フレイレそれぞれの教育的提言の理論的実践的な結びつきで明らかです。

二人は同時代を生きた教育者ですが、活動した社会背景(フランスとブラジル)は異なります。フレネが特に学童教育(0歳から14歳まで)に従事したのに対し、フレイレは

従来の教育を行う学校から離れようとして、いわゆる「文化サークル」をつくり、まず成人教育に力を注ぎました。

しかし、この二人の教育者の提言にはいくつかの共通点が見受けられます。彼らは人間性の解放と社会変革のために、政治的中立の立場での教育はできないという姿勢を貫き、教育を実践するという重要な場において人間性と信仰を混合することを、条件つきとはいえ拒絶しました。

二人ともこうした方向に向かいながら、豊かな経験を表現するために人々に言葉を保証するという仕事をしました。言葉を使うことは世界を変革する過程で、自主性を育むための、また、協同して責任を負うための基本的な一歩となります。

幼児に言葉を与える「自由な表現」は、フレネの偉大な発見でした。各々の経験を「試行錯誤」し、語ることを通じて、子ども達は自主性や批判的考察、責任感を養います。またパウロ・フレイレにとっても、言葉話すことは社会を変革するための基本的一歩でした。というのも、人は自らの言葉で語る時、はじめて自分自身の生きる道を意識して構築し始めるものだからです。フレネもフレイレも、現実を批判的に見つめたり理解したり変革したりすることを模索する者同士の対話や協力を勧めています。

パウロ・フレイレが大人の社会政治的活動や組織化に関する教育事業に力を入れたとするなら、フレネは行動主義的指導法、協同作業の組織化、自然環境や社会環境とのコミュニケーション手段を発展させながら、学校の環境を変えることを提言したと言えるでしょう。

フレネとフレイレの教育的提言には類似点と相違点がそれぞれありますが、互いに他を補完し合う関係にあります。

パウロ・フレイレは「意識化すること」の初期の実践で、調査し、それを文章化し、テーマを読み取るという指導法を展開していますが、そこには注意が必要でした。その目的や関わっている主体個人を見失ったときには、指導法と技術で人を煙に巻いたり、それらを絶対的なものにとらえてしまう危険性があったからです。「意識化すること」への非難を恐れ、パウロ・フレイレは教育実践の場と相互関係を築くことにはあまり力を注ぎませんでした。フレネがその点を補っています。

多くの闘争的政治理念を持った教師たちがメソッドと技術を利用して教室全体を支配していることに、フレネは気づきましたが、それはその教師たちが選んだ自由・連帯というイデオロギーとは相容れないものでした。

そこで彼は物質的技術的に、また教育学的にも組織化することの重要性に光を当てたのです。このため、教育実践の目的を政治的に明らかにしなくてはならないという懸念はフレイレによっても強調されましたが、フレネが提案した技術にこそ、学校の実践と結びつくより大きな可能性を見出す結果となるのです。

ブラジルとイタリアの相互文化教育協力 --- 民衆教育間の架け橋 ---

諸民衆教育間での交流は理論面だけでなく、実践面においても明らかに実り多いものとなりました。ここでささやかな相互文化教育の協同体験を、そのひとつの例としてあげたいと思います。

それはブラジルの状況に於けるその広がりや象徴性を伝えるためだけではなく、これがイタリアの教育協同運動（MCE）に関わりながらブラジルで発展した民間教育プロジェクトであるからであり、民間教育の実践の中で生まれた相互文化協力に関する重要な問いかけを投げかけているからです。

ブラジルで開催した RIDEF 1988 の間、MCE の教師たちはフロリアノポリスの民間教育の教師たちと交流を始めました。彼らはその後数年間手紙をやりとりしたり、ブラジルのイタリア人教師たち、またイタリアのブラジル人教師たちの仲介で交流したりし、両者の結びつきは一層強くなりました。

1991 年には「知る工房」プロジェクトを実現しています。そのプロジェクトでは、フロリアノポリス郊外の 4 つのコミュニティーに約 120 人の子どもたちを集めて教育空間を始めました。時を同じくしてイタリアでは成人の養成と同時に、相互文化の教育実験セミナー、子ども達との教育セミナー、そして連帯を深める実践を行いました。このプロジェクトは発展し、ペルーシアの CIDIS (民主的イニシャティヴと情報の振興センター) の後押しで 94 ~ 97 年にヨーロッパ経済共同体から資金援助を得ました。こうしてこの期間に、イタリアの 8 つの学校がフロリアノポリスの「知る工房」の 8 つのグループと提携し、子どもたちと教師たちの交流や協力のきずなが深められました。

「知る工房」プロジェクトは参加者の幅を広げようとする背景を持ち、文化と連帯を通じた関係の場を活性化しようとしています。その連帯は経済条件の格差を克服するため、また、相互関係と信頼関係を持ち続けるために必要とされます。また、交流の仲立ちの道具として文化を優先させた事実には、援助主義や南北間に重くのしかかる優・劣という型にはまった考え方を克服しようとする意図が見えます。

特に MCE ブラジルーイタリア・プロジェクトが導いた協力の革新性は、まさに「他者を利用しないことに配慮した連帯」にあります。これは伝統的文化から発して、文化を再構築するための中心的支えであり、他者や自然を否定したり、破壊したりすることの意味をくつがえしていると思います。他から搾取しないように配慮することは「自己中心的」論理を越えて、自立した主体としての個人の間で「相互関係」の論理を受け入れることを意味します。

エッセイ



「工房プロジェクト」でのグループセミナーは、通常、決められた厳密なプログラムに従うのではなく、試行錯誤しながら多数の道を模索しました。しかし、これは成り行き任せということではありません。むしろ、柔軟性はグループの文化のひとつの特性なのです。子ども向けセミナーではこの点がはっきりわかります。

そこでは、子ども達の質問に応じ（アニメーターは子どもたちの興味に応じて臨機応変に対処）人間関係の実際の場合として与えられた場所を描き（期待、出会い、そして言葉をかわす機会は無計画に行き当たりばったりの作業を続けるからではなく、実際に出会いを続けることから生まれます）、情緒性や感情を自由に表現することに注目したり、理解したりすることを学ぶのです。

また大人向けセミナーでは、自由に誰でも参加できるということはもとより、対話、冒険、予想できない展開に対し、参加者が好奇心、広く受け入れる心、自由な精神を抱くことで、各個人が主体になることができます。

だから、異なる区域や社会背景で暮らすかなりの人々が既に何年も前から、ますます豊かで創造的な側面を見せるセミナーにおいて、互いに大きく異なるイニシアティブを交流させながら、共にいることの喜びを見出だしてきました。

探究心や人間関係、感受性に注目することで、教育過程の「多様化」が起こると私は思います。従来の方針では人間形成過程は1つのテーマに絞られ、その内容全てを予め規定し、把握出来るものとしています。

このような方針のもとでは、子供たちの探求心、人間関係、感受性などは予測できず、把握できない状況を作りやすいということで、教育の主旨に沿うものではないとされています。

しかし、これら従来の方針に「相反する要素」に注目してみると、教育過程をともに体験することで様々な背景を持った（個人個人が既に複雑で活動的な）多種多様な人達がお互いに影響し合うことに気づかされます。

また、何らかの意義（意思表示、価値、方向性）があっても、決してその重要性を限定することなく、いろいろなプロセスへの展開が可能なのもわかります。

人とのつながりや関係は、悩み、希望、興味、関心を分かち合うことで深まります。この意味において、集団での教育指導を実現させるためには、当事者同士が交流し、各々の好奇心や希望を比べ、自分流の方法、他の人との分かち合い、責任を確立できるような環境を作ることが必要です。

それでは、プロジェクトへの参加とそのプロジェクトの社会的インパクトについて評価することは可能でしょうか？

この問いと対比されるもう一つの問いがあります。

どのようにして子供たちの目の輝きを測ればいいのですか？

この二つの問いの対比が、プロジェクトがまず第一に人間を重要とする実際の教育過程で評価されるに違いないことを明らかにしました。

存在すること、価値があること、主役であること、言い替えれば、アイデンティティ、自尊、自己承認の確立。こういったこと全てが、他人を思いやり受け入れるという「女性的な」方法を通して、自分自身を主体とさせるのです。

これらの「女性原理」というものは女性だけに限るものではなく、威嚇でも競争でもない、連帯、相互関係を築くのを可能にする重要なことです。

こうしたことが基になれば、人間関係や文化的関係に対する新たな意識を育て、政治、文化の創造的な企画領域を広げ、人間の英知とそれが生み出す力を排他的、批判的な論理では

なく、統合的、相互的な考えへと再び向かわせることが可能でしょう。

はたしてこの大仕事は熟すことのない緑の島のまま、マイノリティの夢となってしまったのでしょうか？

これは難しい質問です。なぜなら社会の問題を根底から解決するためには全面的な構造改革を必要なのですが、同時に、社会というものは必要な変革をもたらす急進的な提言を孤立させ、中和させようとする傾向にあるからです。

改革への挑戦は、その規模の大小や繋がりがあるか孤立しているかの形態が問題なのではなく、「活動が続いているか」それとも「活動が沈滞しているか」、実を結ぶものか、そうでないかにかかっていると思います。

そして、改革挑戦への活力は、複雑さに押し潰されることなく、多くの人の自覚を促しながら成長できるほどの大きさになったとき、それをおしとどめようとする不活性の力を越えるのです。

このプロジェクトを通して生まれ、イニシアティブを生かす状況と多様な主体間の創造的な関係から作られるのは、こういったことではないでしょうか？

この豊かで活動的な民衆教育の共同ネットワークに参加して私たちが喜びを感じるのは、こういったことのためではないでしょうか？

ブラジルとイタリアの民衆教育グループの間で生まれたこの共同活動の活気、総体性、柔軟性、革新性こそが、世界の異なる国々で育てられた民衆教育の関係がどのようにして実りあるものになりえるのかを私たちに教えてくれています。

(翻訳：多田 聡子
川上 素子
青柳 啓子
川嶋 由美子
黒川 素子)

レイナルド・M・フレウリ

ブラジル、サンタ・カタリーナ国立大学の教授で。哲学と教育史が専門。

民間教育と多文化間教育をテーマに研究を続け、現在までに9冊の本を執筆、30ほどの学術論文を発表している。また、学内の教育科学センターの”大学と社会運動”を研究するグループ”MOVER”のコーディネーターをし、教育におけるポスト階級 (posto-grado) プログラムで教鞭を執る。